

世界地誌に関する授業の履修学生の 興味・関心と授業実践の例

An example of the interest of the students in the class concerning
regional geography of the world and the practice in the class

三 原 昌 巳

Abstract

It is important for the instructor in charge to develop various classes related to “regional geography of world” in a way that is easy to understand for a large number of enrolled students. In this article, it will be clarified where the students are interested in the regions of the world. While presenting examples of class practice, the purpose of this study is to consider the class issues related to the world magazine in a large number of classes, and to obtain basic materials contributing to class improvement of geography education.

Students had experience in visiting many Asian countries, mainly in East Asia and Southeast Asia, countries and regions in Oceania, and few Europe. On the other hand, there were no countries in Africa, Central and South America, Central Asia, or West Asia as destinations for overseas travel. As class practice, Foreign people in Japan, agriculture in California, and landscape photography were explained.

regional geography of the world, geography, geography education, landscape photograph, practice in the class

世界地誌, 地理学, 地理教育, 景観写真, 授業実践

1. はじめに

文部科学省の高等学校学習指導要領（2018）に「地誌的考察」が挙げられるように、地誌は、地理教育の重要な構成要素である。同時に、地誌は特定の「地域についての記述」であるが、世界地誌の授業は特定の地域に限定せず、網羅的に、広範囲に及ぶ世界の諸地域を取り上げることが求められる。

しかしながら、大学教育においては、授業回数の制約により、世界の諸地域の全てを学習することは極めて困難であり、先進国や近隣諸国に関する地誌を中心にして、多くの学生が大学入学までに学習した内容が授業の素材となりがちである。そのため、その地域の代表的な例を担当教員が学生に対し断片的に伝えることで、むしろ学生の、その地域に対する先入観をより強固なものにしてしまう危惧が生じる。さらに、大人数授業においての場合、世界地誌に関する知識や素養はもちろんのこと、興味・関心が履修学生によって大きく異なる。大学教育には、留学生も在籍し、多様な学生が揃う。ゆえに、世界地誌に関する授業を大人数の履修学生に理解しやすく展開するため担当教員に様々な工夫が必然であるといえる。

そこで、本稿では、履修学生が世界の諸地域にどこに興味・関心を抱いているのかを明らかにしたうえで、あえて、学生のほとんどが興味・関心を持っていなかった地域を取り上げた授業実践の例を報告する。そして、大人数授業における世界地誌に関する授業の課題を考察し、地理教育の授業改善に資す

る基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査対象と方法

調査対象は、2018年度後期の半期授業「地誌学概論」の履修学生である。履修登録者数は、経済学部経済学科143人、経済学部現代ビジネス科5人、人間科学部人間科学科15人の計163人で、試験欠席者を除くと155人の実履修者がみられた。学年は1年生（2018年度入学生）が127人、2年生以上（2017年度以前の入学生）が36人であった。留学生は10人であった。

授業内容を表1に示した。第1回の講義は授業のねらいや授業中の注意事項などのガイダンスに加え、地誌学の対象や視点、隣接分野との関連などを示した。第2回からは、日本から西廻りに世界一周できるような順で2～3週をかけて各地域の地誌について講義を行い、定期試験期間に期末試験を実施した。また、第4回～第6回、第8回～第10回のうちにそれぞれ1回ずつ課題提出を求めた。使用テキストは決めていないが、『世界地誌シリーズ』（朝倉書店）、『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語——』（朝倉書店）を主要参考文献とし、プリント配布とスライド投影による講義形式で進めた。

表1 「地誌学概論」の授業計画

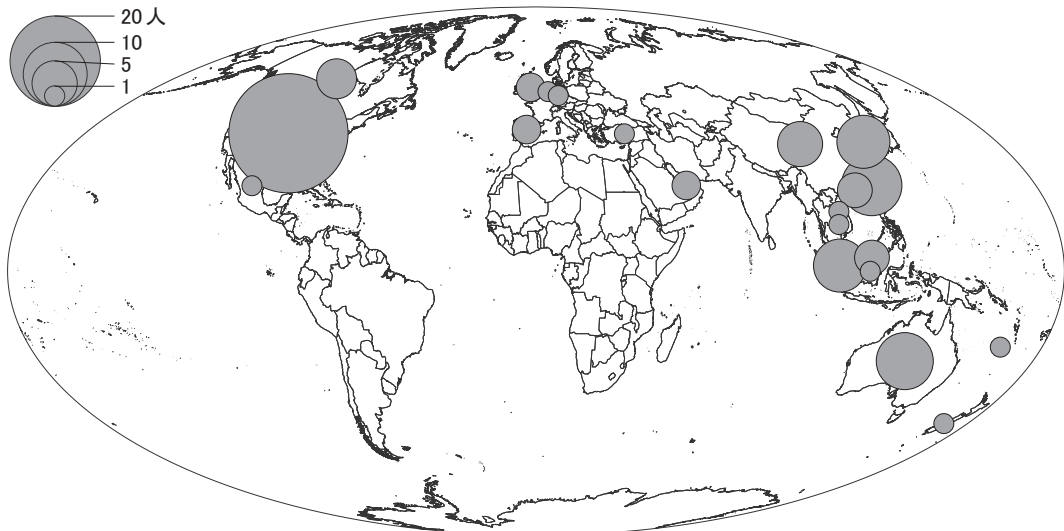
授業回	授業内容
1	地誌学を学ぶために：地域をみる視角
2	モンスーンアジア：多くの人口を支える稲作
3	モンスーンアジア：工業化と近代化
4	西アジア：自然環境と文化
5	西アジア：石油資源と国際政治
6	ヨーロッパ：自然環境と文化
7	ヨーロッパ：産業とその変化
8	ヨーロッパ：EUと国民国家
9	北アメリカ大陸：自然環境と文化
10	北アメリカ大陸：旧大陸からの伝播
11	北アメリカ大陸：政治と国際関係
12	南アメリカ大陸：自然環境と産業
13	南アメリカ大陸：移民を通じた日本との関わり
14	まとめと再考

履修学生の人数が100人を超える大規模授業のため、授業内において履修学生に対し個別にそれぞれの興味・関心を聞くことは不可能である。そこで、海外経験と関心を明らかにする手がかりとして海外渡航経験の有無、今後旅行してみたい国の名称に関するアンケートを行った。第1回の授業時において出席者（139人）に対し、アンケートの主旨を伝え、リアクションペーパーに記入するよう指示した。成績に一切影響がないことを口頭で説明し、記入の了解を得た。アンケート票の配布・回収も授業時間内に行い、出席者全員がアンケート票を提出した。また、課題の1つとして、日本に関する記事とスポーツ記事を除外し世界の動向に関して、興味のある新聞記事を1つ添付し記事の内容を考察する課題を提示した。記事の掲載期間は、2018年9～10月を原則としたが、履修学生の興味・関心に相当するものがあれば、それ以外の期間の記事であってもよいことを伝えた。

3. 履修学生の海外経験と興味・関心

履修学生の世界への関心を明らかにするため、アンケートでは、履修学生に対し、海外で渡航経験のある世界の国々、今後旅行してみたい世界の国々（いずれも複数回答）を記入してもらった。学年による差はなく、回答者のうち留学生（全員が中国出身）8人は母国と日本を除外した。

図1は、履修学生の海外渡航先である。海外渡航経験のある学生は59人（実履修者に対する割合：38.1%）で、その渡航先として挙がった国の名称は計21か国となっている。アメリカ合衆国が35人



注：回答者 59 人。複数回答による。台湾、香港は、中国本土と別に集計した。

図 1 履修学生の海外渡航先

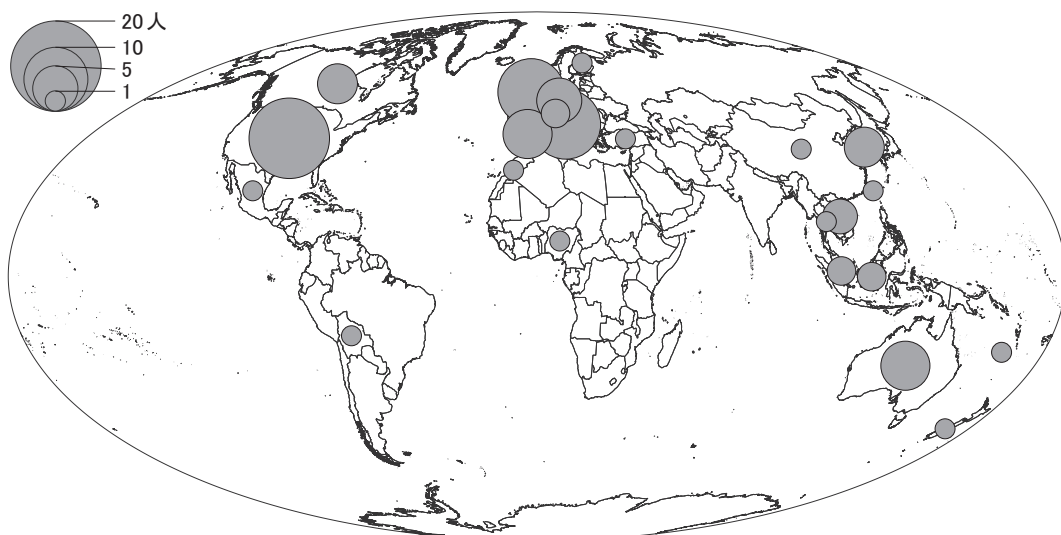
(22.6%) で最も多く、次いで台湾が 9 人 (5.8%) となっている。以下、複数名による回答としては、オーストラリアが 8 人 (5.2%)、韓国が 7 人 (4.5%)、シンガポールが 7 人 (4.5%)、カナダ 4 人 (2.6%)、アラブ首長国連邦 2 人 (1.3%)、スペイン 2 人 (1.3%) となっている。

次に、今後旅行してみたい世界の国や地域について図 2 と図 3 を示す。図 2 は、海外渡航経験のある履修学生について、旅行してみたい世界の国々を示したものである。回答に挙げた国の名称は計 25 か国で、アメリカ合衆国が 16 人 (10.3%) で最も多く、次いでイタリアとフランスがそれぞれ 12 人 (7.7%) となっている。複数名による回答としては、イギリス 11 人 (7.1%)、オーストラリアとスペインがそれぞれ 6 人 (3.9%)、ドイツ 5 人 (3.2%)、カナダ、韓国とニュージーランドがそれぞれ 4 人 (2.6%)、ベトナム 3 人 (1.9%)、インドネシア、シンガポール、スイスとロシアがそれぞれ 2 人 (1.3%) となっている。

図 3 は、海外渡航経験のない履修学生について、旅行してみたい世界の国や地域を示したものである。海外渡航経験のない学生は 60 人 (実履修者に対する割合：38.7%) であった。回答に挙げた国の名称は 18 か国で、海外渡航経験のある履修学生と比較すると少ない。アメリカ合衆国が 21 人 (13.5%) で最も多く、次いでイタリアが 17 人 (11.0%) となっている。複数名による回答としては、フランス 11 人、イギリス 6 人 (3.9%)、オーストラリアと韓国がそれぞれ 5 人 (3.2%)、カナダとドイツがそれぞれ 4 人 (2.6%)、スペインとシンガポールがそれぞれ 3 人 (1.9%)、オランダと台湾がそれぞれ 2 人 (1.3%) となっている。

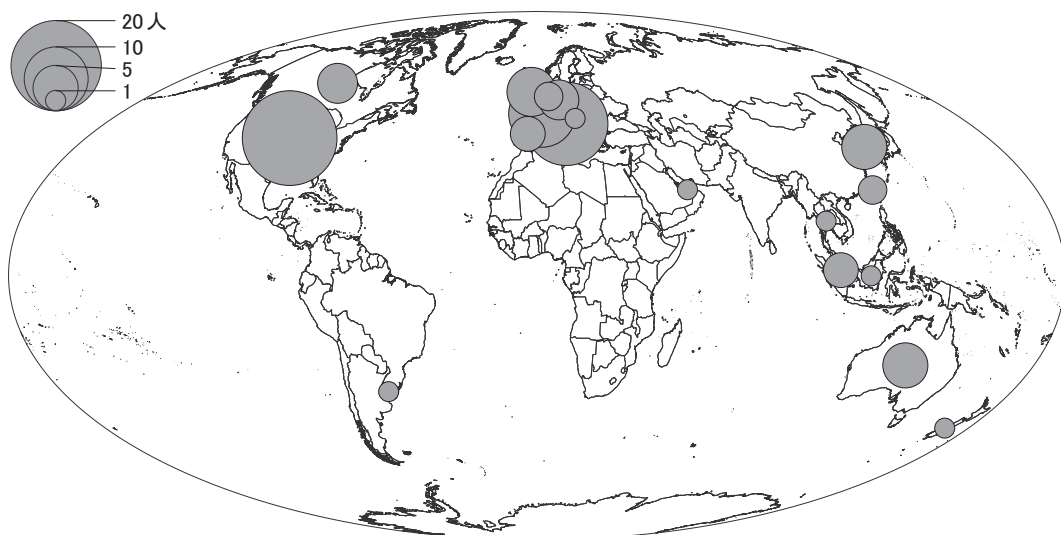
さらに世界の動向に関して、興味のある新聞記事についてのレポートを提出した履修学生は 138 人で、日本国内についての新聞記事を提出した学生 10 名、あるいは新聞記事以外のものを提出した学生 8 人を除くと、120 人である。履修学生の選んだ新聞記事は計 64 件の記事で、レポート提出者のうち留学生 (全員が中国出身) 5 人のうち 4 人が中国に関する記事を選んだ。

表 2 は、複数名の学生が選んだ新聞記事を示したものである。複数の国にまたがる新聞記事は、それぞれの国を集計した。2018 年 9 月 28 日に起きたスラウェシ島沖の地震によるインドネシアの被害に関する記事が 21 件で最も多く、次いで米中の貿易戦争、サウジアラビア人記者殺害、台湾の特急列車事



注：回答者 59 人。複数回答による。台湾は、中国本土と別に集計した。

図2 旅行してみたい世界の国や地域（渡航歴あり）



注：回答者 60 人。複数回答による。台湾は、中国本土と別に集計した。

図3 旅行してみたい世界の国や地域（渡航歴なし）

表 2 履修学生の選んだ新聞記事

国名	種類	記事の主な内容	人数
インドネシア	災害	地震被害	21
アメリカ	政治	中国との貿易戦争	5
トルコ／サウジアラビア	政治	サウジアラビア人記者殺害	5
台湾	事件	特急列車事故	5
中国	政治	日中首脳会談	5
中国	政治	南シナ海の軍事力拡大	4
中国・香港・マカオ	社会	世界最長の橋建設	5
カンボジア・ミャンマー	経済	最低賃金引上げ	3
北朝鮮	政治	核開発	3
シリア	事件	日本人の拘束	3
パプアニューギニア	災害	地震被害	3
アフガニスタン	政治	総選挙	2
アメリカ	事件	銃乱射事件	2
インドネシア	事件	旅客機不明	2
台湾	政治	対中関係	2
中国	経済	一带一路	2
中国	経済	ODA	2

注：複数名による回答を多い順に示した。

故、日中首脳会談がそれぞれ 5 件となっている。

国別にみると、中国に関する新聞記事が 31 件で最も多く、次いでインドネシアが 28 件、アメリカ合衆国が 8 件であった。ブラジル 1 件とソマリア 1 件を除くと、南アメリカ、アフリカ、ヨーロッパの国々に関する新聞記事はみられなかった。

4. 履修学生の世界地誌に関する興味・関心を踏まえた授業実践

アンケートの結果をみると、履修学生は 4 割近くが海外渡航経験を持ち、25 か国にも及ぶ。渡航先では、アメリカ合衆国を除くと、東アジア・東南アジアを中心としたアジア方面、オセアニアの国々や地域が多く、ヨーロッパは少ない。一方、海外渡航先にアフリカや中南米、中央アジア、西アジアの国々はみられなかった。また、旅行してみたい世界の国や地域は、渡航経験の有無にかかわらず、アメリカ合衆国の回答が最も多く、東アジア・東南アジアを中心としたアジア、オセアニアの国々や地域も回答が多かった。さらに、海外渡航先として回答が少なかったヨーロッパは、旅行してみたい世界の国や地域として回答が多くみられ、履修学生の興味・関心がある地域であることがわかる。一方、アフリカや中南米、中央アジア、西アジアの国々は、旅行してみたい世界の国や地域としても回答が少なく、履修学生の興味・関心が向かいにくい空白地域といえる。

一方で、履修学生が選んだ新聞記事を見ると、アメリカ合衆国、インドネシア、中国が上位に挙がった。とくに、中国に関する新聞記事はさまざまな種類の出来事が挙がり、履修学生の興味・関心の高さ

がうかがえる。履修学生のうち、留学生は全て中国出身であり、彼らの選んだ新聞記事は自国である中国であったことも特徴的であった。また、インドネシアに関する新聞記事は、パプアニューギニアと合わせて地震の被害に関するものが主であるが、これらの地域が日本から比較的に近いこと、日本でも多く地震がみられることなどで興味・関心が比較的に高いと思われる。同時に、レポートの提出を求めた時期に大きなニュースとして扱われたことも、履修学生の興味・関心を抱かせた要因の1つと考えられる。一方、日本の新聞記事の紙面でヨーロッパの扱いが小さく、レポートの提出を求めた時期に紙面ににぎわすような大きなニュースがなかったためか、ヨーロッパに関する新聞記事を選んだ履修学生はいなかった。他方、中央アジア、西アジアの国々は、海外渡航先ならびに旅行してみたい世界の国や地域として回答が少なかったものの、履修学生が選んだ新聞記事にみられた。これに対し、アフリカや中南米の国々は新聞記事においてもほとんどみられず、履修学生の興味・関心の低さがうかがえた。これらの結果を元にして、次に示すような授業実践を試みた。

① 日本との関わりを意識させる

履修学生の身近な地域にみられる現象をもとに、それらが世界とつながっていることを理解することで、グローバルな視野が広がる。授業が開講されていた2018年11月には、単純労働を含む外国人労働者の受入れを拡大する出入国管理法の改正案が閣議決定された。そこで、この出入国管理法の成立から改正までの制度の変遷を整理するとともに、日本における外国人登録者数の動向を示した。また、とくに、近年これまでの流入外国人に加えてネパール人やベトナム人の流入が急増しており、それらの送り出し国側の政治や経済などの背景について取り上げた。大学付近には、ネパール国旗が吊るされたインド料理店もあり、身近な地域にみられる現象であった。授業の最後に行うコメントシートによれば、「インド料理店なのにネパール国旗があることが不思議に思っていた。その疑問が解決できてよかった」との声がみられた。

また、アメリカ合衆国の授業の回では、カリフォルニアの農業と移民を取り上げた。日系移民がカリフォルニアの農業を支えてきた歴史があること、カリフォルニア産レタスが日本にも輸入されていること、メキシコ人の農業労働者が低賃金労働力として農業を支えているが、国境警備が強化されればカリフォルニアの農業にも影響が出る可能性があること（矢ヶ崎 2011）などを説明した。内容は、日本、アメリカ、メキシコの3か国にわたっており、グローバルな枠組みにおいて地域を理解することの重要性を学べる好例であったと思われる。アメリカ合衆国は多くの履修学生にとって関心が高いが、メキシコはそうではない。「芋づる式」に他の地域についても学習することで、それぞれの地域について新たな好奇心が生まれ、学習意欲へとつながることも大切ではなかろうか。

時事に関するホットな話題は、履修学生が地誌的な考察や異文化理解を身につけることよりも、目新しさに対する興奮や驚きにとどまってしまうがちである。履修学生が地誌的理解を深めるためには、身近にみられる現象が世界の国々や地域にどのように結びついているのかを丁寧に説明することが大切であると感じた。

② 景観写真を活用する

地理教育において、フィールドワークでの見聞が重視され、教材の一環として景観写真が活用されている（原 2012；浮田ほか 2015；加賀美・荒井編 2018）。次の写真はそれぞれポーランドの旧ユダヤ人居住区（写真1）とチェコの首都プラハの景観（写真2）である。履修学生の西ヨーロッパに偏向する興味・関心を踏まえ、ヨーロッパ地域の授業の回において、ポーランドとチェコという東ヨーロッパの写真を提示し、これらの写真から読み取れるものを説明した。写真1では、ポーランドの位置や主要都市について地図を示しながら説明したあと、ユダヤ人について概説を行った。西アジアの授業の回において、宗教の戒律や特徴、宗教間の対立などは学習しているため、その内容を復習しながら、ヨーロッパにおける多様な民族構成を説明した。写真2は、有名なプラハの街並みであるが、ヨーロッパにお



写真1 旧ユダヤ人居住区（ポーランド）



写真2 プラハの街並み（チェコ）

注：著者撮影

る観光史や近年の都市観光，農村ツーリズム，世界遺産の枠組みなど観光動向について多面的な視点で，東ヨーロッパと西ヨーロッパに区分しながら説明を行った。

このような写真の活用は，履修学生が頭に描いていた地図がヨーロッパのほんの一部に過ぎないことを理解したり，多様な地域が世界にあることを再認識したりする有効な手立ての一つになると思われる。授業の最後に行うコメントシートによれば，「（ポーランドには）一生のうちに一度は行ってみたいと思った」というコメントが複数みられた（「地名は全て覚えなければなりませんか」とテストを心配する声もあった）。

しかし，写真の活用は次の2点で課題がある。1つ目に，冒頭で述べた履修学生の先入観についてである。写真はその地域の特徴がとてもよく読み取れるものが常に採用されがちで，履修学生の先入観つまりステレオタイプの地域のイメージを助長しやすくなる。このため，履修学生に対し，視覚による印象だけでなく，教員の概説にも耳を傾けるよう工夫することが求められる。また，履修学生が先入観すら抱けない空白地域では，教員が提示した写真1つがその地域のイメージを構築してしまうことに留意しなければならないであろう。2つ目に，世界の諸地域にフィールドワークに赴く教員は限られていることである。写真を説明しようとするとき，自分が撮影したものであればリアリティをもって，具体的に，変化に富んだ地域の様子を説明することができる。他者が撮影した写真は，たとえインパクトがあるものであっても，その日の天気や場所の様子までを詳しく述べることが出来ない。こうしたことから，教員自らが現地に出向き撮影した写真を授業内で提示することがより望ましいが，教員が授業準備のために使える時間や費用は非常に限られる。例えば，辰己（2006）は自身のフィールドであるフィジーの地誌を世界地誌に取り入れ，豊富なフィールドワークに基づく地誌教育の実践を試みている。フィジーの地誌から世界地誌への展開にはやや強引さが見受けられるものの，貴重なフィールド資料は魅力的な地理の授業を想起させ，他者に代替で実践することは不可能である。こうしたことから，教員の個人的な体験を伝えることは，経験重視の地理学において重要であることは言うまでもなく，担当教員が十分なフィールドワークに打ち込むことができる環境構築も大切である。

5. おわりに

本研究では，アンケートやレポートの内容を分析することにより，履修学生が世界の諸地域にどこに興味・関心を抱いているのかを明らかにし，授業実践の例を提示しながら，大人数授業における世界地誌に関する授業の課題を考察し，地理教育の授業改善に資する基礎資料を得ることを目的とした。

アンケート集計の支援として、学内のドットキャンパスが挙げられるが、本研究では調査対象に対し、アンケートの内容が成績に一切影響しない旨を丁寧に説明するため、授業内での手書きでの記入を実施した。履修学生の学年は1年生が大半を占め、学年による差はみられなかったが、履修学生の興味・関心は年代によって異なると考えられ、断続的にアンケートを行うことが肝要である。そのためには、オンラインでのアンケート入力などの手段の導入も検討していきたい。今後も工夫を凝らし、大学教育に資する、充実した地理学関連科目の授業運営を実践していきたい。

参考文献

- 浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭 2015. 『オーストリアの風景』ナカニシヤ出版. 192 p.
- 加賀美雅弘・荒井正剛編 2018. 『景観写真で読み解く地理（東京学芸大学地理学会シリーズⅡ -3）』古今書院. 108 p.
- 辰己真知子 2006. 世界地誌教育のあり方を考える——フィジーを事例として——. 立命館地理学 18: 29-45.
- 原 真一 2012. 『写真地理を考える——a Photograph Notebook』ナカニシヤ出版. 150 p.
- 文部科学省 2018. 「高等学校学習指導要領」 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf (2019年6月11日最終閲覧).
- 矢ヶ崎典隆 2011. 農業地域の形成と食料生産. 矢ヶ崎典隆編『世界地誌シリーズ4 アメリカ』朝倉書店. 165 p. 57-72.